

令和2年度～5年度使用 小学校用教科用図書採択理由書

宮崎大学教育学部附属小学校

教科用図書名 【 国語 】
発行者名 【 東京書籍 】
教科書名 【 新しい国語 】

観点1 教科目標の達成及び単元（題材）の構成・配列等
<p>(1) 単元の構成については、第2学年の下の教科書から「つかむ」「取り組む」「ふり返る」の3段階に分けて構成されるとともに、各単元の始めや終わりに育成すべき力を示した「言葉の力」を設け、「言葉の力」を確実に育成できるような工夫が見られる。</p> <p>(2) 「読むこと」の単元の最初に扉のページが設けられており、子どもが学習の見通しや目的意識をもつことができるように、どのような言語活動を行うのか、そのためにどのような「言葉の力」を身に付けていけばよいのかということが明記されている。また、既習事項の活用を促す「覚えているかな」が設けられ、段階的、螺旋的に「言葉の力」が身に付くような工夫が見られる。</p> <p>(3) 単元の配列については、4月を学習の基盤作りの期間として重視し、上巻頭に対話の仕方や情報扱い方、図書館活用の仕方等を配置することで、年間を通じて活用したい基礎的・基本的な事項を年度当初に指導できる工夫が見られる。また、7月と12月に「これまでの学習をふり返って」、3月に「1年間の学習をふり返って」というページを設け、「何ができるようになったか」「何を学んだ」「どのように学んだか」ということをふりかえりながら、「学びに向かう力、人間性等」を育てていくような工夫が見られる。</p> <p>(4) 単元の数については、大単元が15個構成されている。大単元に、「読むこと」を多く位置付けたうえで、他領域の教材がバランスよく配列されている。また、読む活動をとおして学んだことを書く活動に生かすことができるようにするといった、領域間の有機的な関連を図るような工夫も見られる。</p>
観点2 内容や指導の充実
<p>(1) 主体的・対話的で深い学びを展開させるために、各学年の最初に対話的な学びの基礎・基本となる「話すこと・聞くこと」の小単元を設け、年間を通して対話的な学びが意識できるようにしている。また、各単元に「つかむ」という導入ページを設け既習事項を想起させる等、主体的な学習を進められる工夫が見られる。また、一年間の学習の見通しをもたせるために、巻頭にその学年で身に付ける言葉の力の一覧を示したり、国語の学習の進め方を明示したりして、「何を」「どのように」学ぶのかということ子どもが理解できるようにしている。</p> <p>(2) 前学年の学習内容や関連する単元を示した「覚えているかな」コーナーを設定し、子どもがこれまでに学んだことを生かして学習に取り組むことができるような工夫が見られる。また、活用する力を育てるために、単元で学習した内容をどのような場面で生かすことが考えられるかということを示した「生かそう」コーナーを設定し、学習したことを他領域や他教科等及び日常生活で活用することができるようにする工夫が見られる。</p> <p>(3) 生きて働く「知識・技能」を習得させるために、「ことばあつめ」「言葉の広場」を設け、語彙を広げたり生活の中で活用させたりできるようにしている。また、単元の中で特に押さえておきたい「知識・技能」を取り上げる「おさえる」コーナーを設定し、思考・判断・表現するなかで生きて働く「知識・技能」を身に付けられるようにする工夫が見られる。さらに、当該学年の教材文と関連させながら、つまずきやすい事項について習得を確かにする練習教材を設け、定着・習熟を図る工夫が見られる。</p> <p>(4) 確かに使える語彙力を育てるために、単元末に、学習内容にかかわる話型や文型、言葉を取り上げた「言葉」の欄が設けられ、教材文の中で出合った言葉をきっかけに他の言葉に目を向けたり、使う言葉を意識しながら活動に取り組んだりすることができるようにしている。また、日本語の豊かさに触れさせるために、四季折々の自然や風物を表現した詩歌に触れる「季節の足音」、俳句や短歌といった言語文化を取り上げた「伝えたい言の葉」を設け、受け継がれてきた言語文化を大切に、発展を願う態度を育てる工夫が見られる。</p> <p>(5) 未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」を育成するために、各単元冒頭のページに、児童に学びの自覚を促す「つかむ」及び育成すべき力を示した「言葉の力」を明記し、単元末で</p>

振り返りの観点を示した「ふりかえる」及び「言葉の力」を提示している。また、各単元末の「てびき」で単元全体の中心的な課題となる「単元の問い」を設け、児童の学びを深めることができるような工夫が見られる。学習過程のなかで特に重点となる部分には、「言葉の力の問い」を設け、言葉による見方・考え方を働かせて思考・判断・表現することを促し、学びの深まりを生み出す工夫が見られる。

観点3 利便性の向上

- (1) 学習効果や使用上の利便性については、児童にとって定着が難しい内容を身に付けさせることができるように、練習教材が配置されており、デジタルコンテンツを活用してさらに習熟を図ることができる工夫が見られる。
- (2) 児童にとっての分かりやすさについては、新出漢字を欄外で四角囲みにし、文字のサイズを大きくすることで、漢字を際立たせて印象に残す工夫が見られる。また、どの児童にとっても読みやすくするため、1、2年の全ての教材および3年第一単元について、単語や文節の途中での改行が避けられていたり、ページや行を見付けたり発表したりしやすくするため、全ての物語・説明文教材の脚注罫線に、5行ごとの行数字に加え、1行ごとにドット（点）を示したりするなどの工夫が見られる。

観点4 地域の教育の特色や児童の実態等

- (1) 地域の教育の特色を踏まえる工夫としては、第2学年「すきな場しょを教えよう」において、身近な地域にある好きな場所を紹介し合う学習が設定されていたり、第4学年「『ふるさとの食』を伝えよう」において、地域のおすすめの料理や特産品をリーフレットにまとめて伝えるという学習が設定されていたりする。それらの学習をとおして、地域の特色を生かしたり、自分が住む地域により愛着をもったりすることができるように工夫されている。
- (2) 児童の実態等を踏まえる工夫としては、文字や語を正確に読むための基礎を学ぶ1年入門期において、特殊音節（促音-「ねっこ」など、長音-「おばあさん」など、拗音-「しゃしん」など）といった習得が難しいものについて、視覚化や動作化を取り入れて音の仕組みを体感的に捉えられるようにしている。また、生活科を中心とした新一年生のなかに、無理なく位置付けられる題材や活動が多く、スタートカリキュラムにも柔軟に対応することができる。